

「パル判決書の真実」を読んで

渡部昇一さんの「パル判決書の真実(PHP研究所)」を読んだ。結論から言えば、私はこの本を読んで衝撃を受けました。

私はこれまで、私の生まれた昭和18年にまだ続いていた戦争は

- (1)日本帝国陸海軍が大東亜共栄圏の樹立、すなわちアジア制覇のために
- (2)天皇陛下を利用して、国民を扇動し
- (3)軍備の拡張を行い、アジアに進出をした
- (4)これを問題とした米英(連合国)が経済封鎖をはじめとする対抗策を行った。
- (5)資源の乏しい日本は石油を止められたら、戦争するしかなく
- (6)アメリカと戦争し負け、無条件降伏をした。
- (7)東京裁判により、戦争責任者7名が死刑に処せられた。
- (8)この戦争責任者を祭ってある靖国神社に、政府責任者が参拝することは、先の悪い戦争を肯定することであり、近隣諸国から強い非難を受けている。

私は昭和史について詳しく学んだわけではありませんが、これまでの人生で折に触れ、教えられ、頭に入っている内容は概略上記(1)～(8)です。

簡単に表現すると「日本は悪いことをした」または「日本は悪い国だった」原爆を落とされても仕方ない国であった。これを反省し、われわれは絶対平和を守らなければならない。だから平和憲法を守らなければならない。ということです。

東京裁判は11人の裁判官によって裁かれたが、この中でパル判事のみは、全ての罪状は無罪であるという判決をだした。この判決理由を書いたものがパル判決書です。そしてこの判決書の文章を引用しながら判りやすく解説しているのが「パル判決書の真実」です。

そして、この書を読んだ後では「パル判決書」の内容は「正しいこと」を言っているのだ、ということが判りました。パル判決書の内容が正しいということは「東京裁判」は間違っていたと言うことであり、前記(1)～(8)の歴史認識は間違いだと言う事です。間違いが判ったのに、多くの国民に知られていないのは何故か。私たちは何故間違った歴史認識を持つようになってしまったのか。これからどうするべきかなどについて渡部先生は詳しく解説しています。

歴史認識が変わると、靖国神社参拝問題も見方が変わってきます。戦争を起こした責任者(A級戦犯と言われている)がA級戦犯ではなかったとなれば、誰が参拝しても誰も異論は言わないはず(宗教の自由の問題は除く)。

しかしながら歴史の事実は事実であり、政府がアジア諸国に対して謝罪したことは、日本は悪いことをした「悪い国」であることを認めている事になります。そう簡単にあの謝罪は間違っていましたなどと言うことは出来ないでしょう。どの政党でもそのように言っている政党は無いように思います。国際問題は本当に難しいと、思います。まともな国際ルールで行った裁判ではないようなので、このことが逆に裁判のやり直しなども出来ないと思います。

先日「日本は良い国である」というような論文を発表して、退職扱いになった偉い方が居りました。そしてその処遇などが不思議に思いましたが、この本を読んだ後では良く理解出来たような気がします。

最近の国際問題として、テロ問題、核拡散問題、などがありますが、これ等の問題に対する、関係国の対応なども、この本を読んだ後では、もう少し深く考えることが出来るようになりました。北朝鮮問題は拉致も関係するので更に複雑ですが、関係諸国が話し合いと平行して、経済制裁などを実施していること、主要関係国はすでに核を持っており、核実験も、ミサイル発射も行っているのに、核を持つことは悪いことといっているのは、東京裁判で、欧米先進国がアジアを植民地支配したのに、日本のアジア進出を、悪いことと一方的に決め付けたことと似ているところがあるようにも思います。

私は65歳を過ぎて、会社生活も既に終了していますが、本当にまだまだ知らないことが多いと思います。そんな中で「パル判決書の真実」をよんだことは、大変良かったと思っています。しかしながらこの本の意味は深く難しいので、これからも何回も読み直したいと考えています。

2008年12月